

バカと捨て子と召喚獣

鯉の隠れ蓑

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪友である坂本雄二と一緒に帰っていた文月一バカで有名な吉井明久。振り分け試験が終わり、その帰り道に運命な出会いと物語の歯車が動き始める。

そんな吉井明久の物語

目次

プロローグ：出会い	1
第1話：最初の決断	6

プロローグ：出会い

日が沈むのが早くなり始めた冬頃。一人の少女は脱兎のごとく駆け足で走っていた。顔色も悪く、肩で息をし始め、手の感覚がなくなりかけているのも彼女自身感じている。どうしてこうなったのか。どうしてこのような状況に陥らなくちゃいけないのか、彼女自身も混乱している。

「…私、ここで死ぬのかな」

いよいよ意識が混濁し始め、ついに駆け足だった速さも次第に落ちていき、歩くのがやつとの状態まで衰弱してしまっている。2日も食べずにおらず、公園の水で水分補給はしていたが、流石に限界が近くなっている。女性にとつての生命線である髪も体も洗うこともできず、ストレスもピークに近づいてきている。

「だ…誰か。た、助けて…」

フラフラしていた彼女はそのままどこにも知れないマンションの入り口の近くに倒れこんだのであった。彼女はアスファルトの冷たさを感じたまま、静かに瞼を閉じていき、意識を手放した。その瞼から一筋の涙が毀れていた。

ここ文月学園では振り分け試験があり、この振り分け試験によってクラスが決まり、よい環境下で勉強し、青春を謳歌できるかどうかが決まる大事な試験である。

「それまで！ 後ろから前へテスト用紙を集めてください」

そしてその振り分け試験がたった今終わり、この学年の主任である高橋先生がテストを受けた生徒たちに促す。そして一番後ろの席にいたバカの代名詞である吉井明久はテストを前の人に渡すとそのまま机に突っ伏す。

「今回の出来は10問に1問は解けた気がするけど、Aクラス行けた気がしないよ」

今回の出来に愚痴を零していた。そのまま振り分け試験を受けた生徒たちは答案用紙を前に送り、先生のいる一か所に集められる。そして全員の答案用紙を確認した先生は答案用紙の向きを整え、封筒に入れる。

「これで、振り分け試験を終わりにします。できればここにいる全員がいい結果であることを楽しみにしておきますね」

振り分け試験が終わったことを境に他の生徒たちは各々、帰り支度をし始める。僕も帰り支度をすると同時にさっきまでぐったりしていたが、心中ワクワクしていた。この試験中できなかったゲームを一気に消化することができると。ルンルン気分で帰ろうとしたその矢先であった。

「あ、吉井君は観察処分者の仕事があるので残っていてくれと西村先生が言っていましたよ。雑用頑張ってください」

さらば、僕のゲーム時間！ こんにちはは僕の雑用！ 鉄人のことを恨みながら、僕は帰り支度をやめ、職員室へと行ったのである。

その後試験が終わってから1時間の雑用を終えた僕は夕暮れの中一人草臥れていた。折角テストが終わったというのに余韻も色々台無しであると。

「まあ、これで今度こそ終わったし、さっさと帰るかなー！」

校門をくぐると、そこには僕の見知った赤髪のゴリラがニヒルな笑みを浮かべ、門で待ち構えていた。これが美少女だったら最高だった

けど、現実是非情なものである。

「おつ、明久。ようやく雑用は終わったか、毎日ご苦労なこつた」

「チェンジで！」

「おい、明久。いきなり喧嘩売るとはいい度胸じゃねえか！」

「だって、女の子だったらうれしかったけど、暑苦しい鉄人の雑用が終わってようやく解放されたと思った矢先にまた暑苦しいゴリラが待ち構えているとかどんな二重苦だよ!？」

「てめえ！俺も好き好んでお前みたいなバカでブサイク面を待ち構えていたわけじゃねえよ！」

「……」

「やめよう、雄二。これ以上は僕たちが傷つくだけだ……」

「奇遇だな、明久。俺もそう思っていた所だ」

何も生まれない罵倒の仕合に互いに悲しんだ俺たちは両方とも矛を収める。罵倒し合ったこいつは僕の悪友である坂本雄二。神童と言われたことがあり、小学校のころは凄く優秀な生徒だったらしい。中学から悪鬼羅刹と言われ恐れられていたようだけど、高校では最初のころは尖っていたものの今はこの通り丸くなっているらしい。

「つで、雄二。僕のこと待っていたみたいだけど何か用?」

「ああ。明久、お前新しいゲーム買ったんだってな。丁度テストも終わったし、お前の家でゲームしたいけどいいか?」

「別にいいけど、なんでまた?」

「ちよつとお前の家で駄弁りたいだけだ」

雄二の顔色から何かごとなく帰りたくないオーラを漂わせている。これは深くは聞かない方がいいかもしれない。

「わかったよ、それじゃあ一緒に新作のゲームでやろうか。雄二」

「おお、ありがとうな。明久」

僕と雄二はお互い試験から解放され、野郎2人でウキウキしながら帰るといふ誰かに見られたら変な風に誤解されそうな感じで足取り軽く帰って行った。

「そういえば、雄二は試験どうだったの?」

「試験の方が、俺の方は多分駄目だなんていうより途中からやる気な

くしちまったしな。明久は？ いや、言わなくていいか。どうせ目に見えてるしな」

「あつ。雄二。今僕のことバカ扱いしたな」

「いや、事実だろ。実際どれくらい取れたと思うんだ？」

「10問に1問は解けた出来に決まっているじゃないか、我ながらいい出来だって。ちよつと、雄二！ 憐みの目で僕を見ないで！ やめて！」

雄二からの憐みの目線が突き刺さり、心を抉りに来ている。やはり精神攻撃は物凄くダメージが半端ない。それからくだらない事で駄弁っており、マンシヨンの近くにもうすぐ着きそうになっていた。

「そろそろ、着くけど雄二って格闘ゲームって出来るの？」

「格闘ゲームかりアルならお前に勝てそうだけど、ゲームはまだ未経験だな」

「ちよつと！ さりげなくファイティングポーズ取りながら僕の体殴ろうとするのやめて！」

「まあ、ヒートアップしなかつたら多分大丈夫だから、安心しろ！」

「それヒートアップしたら、保障できないってことだよね!? 僕が明日病院送りにされるのが目に見えてるんだけど!?!」

「冗談だから安心しろって。お、おい。明久」

「なんだい、雄二って…誰か倒れてる!?!」

マンシヨンの入り口までたどり着くと衣服がボロボロになって倒れている少女がいた。

「明久。予定変更だ。今すぐ救急車呼ぶぞ。電話自宅にあるな？」

「う、うん。雄二。これは流石に呼んだ方がいいよね。君大丈夫？」

反応がないことを確認して、雄二は緊急性が高いと判断し、そのまま僕のマンシヨンへと入って行き、受話器の方へ急いで行った。僕も彼女をまずマンシヨンに運ぶためにおんぶして、運んでいくが。その時彼女にふとした違和感を感じる。

「身長割に体重がないような気がする。バカな僕でも分かるくらいにこの人すごくやせ細ってる！ それに手首よく見たら、何かで擦れた跡がある。酷い」

マンションの玄関までおんぶしながらゆつくりと入り、彼女の身体に負担がかからない様にソツと降ろした。顔色の方も見てみると蒼白で気分が悪そうに唸っている。目元も閉じてはいるが、涙の痕がくつきり残っている。これはいよいよ時間との勝負になりそうだ。

「大丈夫ですか？ 意識ありますか!？」

そう呼びかけると、その少女は僕の手を弱々しく握る。

「やめて…やめて…独りは嫌…なんで、なんで捨てられたの…嫌。嫌」
そして弱々しく彼女口から独り言のように発せられた。この言葉に戸惑いを覚えるが、今はなりふり構ってられない。雄二は救急車要請を済ましたのか、すぐさまこっちの様子を見に来た。

「つで、そいつはどうだ明久？ 何か変わったことがあったか？」

「それなんだけど、なんかやめてとか独りは嫌ってさつきからずっと呟いているんだ」

雄二はそれを聞き、ギョツとする。そして今度は云々と頷きながら思考をし始める。

「かなり重大なことがあったんだろうな。その様子から察するに、家出…っていうよりは追い出された可能性はあるかもな」

「追い出されたって！ それってかなりまずいじゃないか!? なんでそんなことが起きるんだよ！ おかしいよ！」

「落着け、明久。お前の気持ちはよく分かるが、今は救急車を待とうじゃねえか。それにもし俺の憶測が当たってる場合でもここは病院に連れて行ってこいつの意識を取り戻してからだ」

熱くなつて雄二の胸ぐらを掴んでしまったことを反省しながら、彼女の意識を取り戻すための救急車を待ち続けていたのである。

これが僕と彼女の最初の出会いだった。

第1話：最初の決断

もし自分の家は裕福か？ 問われたら裕福であると言えるであろう。私の家は100年以上前に建てられている豪邸に執事と兄と両親で暮らしていた。ここまで聞けばものすごく裕福で恵まれている環境だと世間一般の人たちはそう思うだろう。けど外見は天国なのに中を開けば地獄の底だった。

『お前は何て無能な奴なんだ。全国での学年18位の成績何てとりおって、私の娘なら学年1位、2位を取れ。彼方を見習えこの無能が！』

私が中学生の頃、全国の模試の結果を見せた瞬間。完璧主義者な父親は私の腕に手錠をかけ、痛い、やめてと言っても殴り続けた。臆病な母親も自分の火の粉が降りかからない様に私を無視し続けた。だって母親も父親の暴力は受けたくなかったから。でも、憤怒の勢いで怒っている父親はもはや人間のそれではなかった。まるで悪鬼に憑りつかられていた化け物そのものだった。

『遙。貴様はなぜ、足を引っ張るのだ。双子の兄としてこれほど恥ずかしいほどはないぞ』

私がバスケットボール選手で優秀選手賞を取り、チームで準優勝した際も父親からも母親からも冷ややかな目で見られ、唯一の味方だと思っていた兄には見下された。あの日から兄は私を玩具扱いし始めた。その様子は無能だと思われる妹を持ち愉悦に浸っている外道そのものだった。

『遙、なんであなたはそんなに優秀じゃないの？ 貴方が優秀じゃないと私の立場がないのよ！』

顔色は真っ青なのに鬼気迫る表情で母親は私に詰め寄り、壁に迫りやる。双子が優秀じゃないと駄目だと母親の自分にも危害が加わるからやめろという保身に走り始めている。もはや病気だ。この日から私は家族の中に味方がいないと察した。そして自分にも同じ血が流れていることに嫌悪を覚えた。

『お嬢様！ 貴方はもうこの家の者ではありませんせぬ』

たった一人の味方であると信じていた執事は満面の笑みを浮かべ、私を追い出す。もはや狂気だ。その執事の目には私への敵意しかない。言葉とは裏腹の行動に私は驚きが隠れないで体を強張らせていた。執事はそのまま正門前に私を突き飛ばした。

『さようなら。もう二度と会うこともないでしょう』

正門の鍵がガチャリと閉められる冷たい金属音が響き渡った。信じていた老執事も私を裏切ったのである。

あれ？

—— 無能のために生きているのだろうか？

裸足であることも忘れ、アスファルトの道、獣道を駆けていく。体が痛みはじめたが、もはやこの空虚な気持ちと心の穴は開いたまままだ。もう何もかも忘れたい気分だ。スマートフォンも投げ捨てた。もうこんなものを持っていても自分には無意味だから。

—— 無能だから？ 玩具だから？ 生きる意味がない

のか？

—— もう分からない。分からない……

いつも大切に髪も唯一心を開いている友達から買ったしやれた服もボロボロになっていくが、関係ない。もうこのままボロボロに朽ち果てようともうどうでもよかった。人から変な目で見られてもどうでもよかった。もう生きることがどうでもよくなってきた。

—— お願い…お願い…どうか…私を…

でも、どうでもいいと思っっているのに、涙が止まらない。余計に駆けている足は止まらない。私は何がしたいのだろうか。

「助けて…誰か助けてよ…」

そして何でこんなことを私は口走っているのだろうか。誰も助け
てくれないと痛感したのに、誰も苦しみから解放されれないと思っ
るのに、それなのに口出る言葉は本当に想っていることは隠せてい
ない。このドロドロした液体状の矛盾が無性に気持ち悪く感じる。口
から吐き出さなくて吐き出してしようがなかった。だから口を開く。
「お願い…お願い…独りは嫌…なんで…なんで捨てられたの…」
今までやってきたことが全て崩れ、壊れ、朽ち果てたのに、私は無
性に誰かのぬくもりを感じたいと思ってしまった。そして糸が切れ
たからのようそのまま意識を手放した。

「ねえ、雄二あの子大丈夫かな？」

文月総合病院に搬送したボロボロの女の子の容体が心配になった
僕は家の鍵を閉め、僕と同様心配していた雄二と共に彼女を今治療し
ている医療室の前のベンチに座っていた。普通だったら救急車の医
者たちに後は任せ、僕たちの役目は御免になるはずだったが、あの子
の独り言と雄二の推論を聞いてしまうとどうしても放っておけなく、
学友であるということ伝えて同伴することを何とか許可しても
らった。

「大丈夫とは言い切れねえが、命には別状はないと信じたい」

雄二もあの状態を見て不安を隠し切れておらず、貧乏揺すりしなが
ら待つていた。貧乏揺すりはやめてほしいが、不安である気持ちも分
からなくはない。雄二には家に帰らせるつもりだったけど、雄二自身
も放っておけないと言い、そのまま病院にまでついてきた。それに雄
二自身も捨てられたという可能性を追いかけるのもある。

療養中の赤いランプの点灯が夕暮れの仄暗さを際立たせている。
でも僕と雄二は彼女を待つことしかできない。歯がゆくて仕方がな
いけど今は医者腕を信じて待つことにする。

それから無言のまま1時間後に赤く点滅していたランプが消える。

どうやら治療が終わったようだ。

「あ、あの。あの子は？ あの子はどうなったのですか？」

僕は医療室から出てきた医者に容体を聞く、まず命だけは助かっていてほしいという気持ちだけしか今は頭にないからこそ、不安で、不安で聞きたかった。

「大丈夫です。命に別状はないですよ。それより君たちはあの子の学友さんかな？ それよりあの子の御両親にこのことを連絡したいのだけど構わないかな。後、なぜああなったのかを聞かなくちゃならないから警察も呼ぶけど構わないかね」

「うえー！ それは…その…」

優しい微笑みを浮かべている様子に僕はホッとしてそのまま座り込んでしまった。話したことすらない人だけど、生きていた良かったと僕は心底感じた。でも後半の部分はごまかしが利かない。学友でもないし、あの子ご両親って言うても僕たちじゃわからないしどうすればいいか分からなくなりそうになった。

「(雄二ヘルプミー!)」

アイコンタクトで雄二に合図を取ると、雄二はため息をつき僕と医者の方へと近づく。だが、雄二が近づく前に別の人がさつき治療した医者の人に近づく。

「ちよつといいですか？ 大事な案件なので」

「ん？ ああ、分かった。君たち少し待っていてくれ」

僕たちはその光景に首をかしげ、彼らの相談が終わるのを待っていると、さつきまで暖かった笑顔だった顔が青ざめている医者がすぐさまこつちに近づいていく。

「君たち。悪いことは言わない、助けた女の子のことは忘れて、ここから離れるのだ」

「はっ？」

いきなりのことに僕たちは疑問を浮かべる。なぜ彼女をいきなり忘れなくちゃいけないのだろうか？ この一言に尽きる。

「ちよ、ちよつと待ってください！ なんて、忘れなくちゃいけないん

ですか？ それに離れるってなんで？」

「では、警告としてもう一度言います。貴方たちの今後の人生を狂わされたくなかったら、あの子のことは忘れて、ここから離れてください」

それは唐突でありにも残酷な宣言だった。意味が分からなさ過ぎて、思考が固まる。体も動かない。今呼吸しているのかわからないぐらい、時間が止まったような感覚に陥る。いいねとその医者の人に言われ、僕はそのまま動けないままだった。

「(人生を狂わされる？ これは一体どういうことなの？)」

まずはそこから考える。彼女がどういった存在なのか僕はますます気になってしまう。

「なるほど、金持ちの『緋泉』のご令嬢がここにいると誰が不都合だから、助けた俺たちにはここに立ち去れと誰かから連絡を貰ったってところか」

さつきまで黙っていた雄二が口を開く。医者の方もその返答に無言で頷く。どうやら彼女は僕たちより遙かに偉い人なのだろうかと推測していると雄二に小突かれ、耳元でヒソヒソと話す。

『緋泉』っていうのは長月市の財閥である霧島財閥と同等の力と経済力を誇っている」

「なんで雄二がそれ知っているの？」

「まあ、翔子に拘束されているとたまにその緋泉っていうのが話題に出てきてな。それに名刺があいつのスカートのポケットの中に入っていた」

「雄二！ あの子のスカートのポケットに平気で手入れたの!? それ普通に犯罪だからね!」

「う、うるせー。でも状況が状況だったから一つでも情報を知りたかったんだよ。しょうがねえことだ」

赤く照れている雄二の顔がものすごく気持ち悪く思いながらも、僕にも大体の状況が呑み込めてきた。つまり僕たちはここで彼女を見殺しにして、普段の生活を謳歌するか。もしくは彼女を救ってその連

絡してきた人を敵に回し、人生を狂わされるかの2択であるということに。

「確かになかったことにすれば、僕も雄二も文月学園でまたバカやりながら、青春を謳歌できる。それに話してもない人を助けようとして狂わされるのもおかしい話だよ」

だけでも僕は知ってしまった。彼女がお嬢様であることより前に。

『助けて…誰か助けてよ…』

あの言葉の一つ一つを僕は忘れていない。

——彼女の心の悲鳴を僕は知ってしまった。

どんなに理屈を考えてもバカだから分からない。僕にはその子を見殺しにするという選択肢が最初から皆無だった。

耳元でのひそひその話から僕は医者の人と正面から向き合う。まだ顔が青ざめており、早く終わってほしいという表情だ。でもごめんなさい。

「ごめん！僕はやっぱり彼女を放っておきたくない！その人を忘れたくない！例えば会って話したこともない人だけど！でも、独りにしないでといった彼女を見殺しにしたくない！」

「き、君は正気か！綺麗ごとを言っている場合ではない！世の中には綺麗ごとで片づけられるなら楽なんだよ！分かりますか!?今あなたの決断隣の御友人の人生をもめちやくちやにしますって言っているようなものだぞ！それが分かっているのか!？」

さつきまで青かった顔が赤い顔に変わり、憤怒の表情を浮かべ僕を睨みつける。雄二はその一連のやり取りを見て、手を挙げる。

「確かに、俺もバカの頼みとはいえ、俺自身の人生をめちやくちやにされるのは流石にごめんだ」

「ゆ、雄二！そ、それじゃあ彼女は！」

「落ち着け明久。それなら、人生を狂わされないような方法を取ればいいだけの話だ。おい、医者。お前も本当は彼女のことを助けたいのだろ？」

「う、くっ！　だ、だが。そんな方法が…」

「いや、一つだけ逆転の切り札がある」

雄二はニヒルな笑みを浮かべ、その作戦を言い始めた。